

【総 評】

日本画58点、洋画192点、版画4点の応募総数254点から151点の入選としました。岡山県内の応募者は108人、県外からの応募数がそれを上まわり146人となりました。

収束しきれないコロナ禍の中、美術に対する熱い思いを感じさせる作品群となりました。応募総数はなかなか回復しませんがしっかりと足元を見て自己の表現世界を構築しようとする作品が多かったように思います。世情も何かと悩ましいことばかりです。その状況のもとで美術をすることの意味合いは深まったといえるでしょう。出品作は感性、思考、技術その傾向は多岐にわたり、入選、落選或いは入賞に拘わらず個々に格闘しているさまが見て取れました。この困難な時期にも拘らず主催されている津山しんわ文化財団には最大の敬意を抱きます。又、引き続き美術界を支えて頂けるよう切に希望いたします。

【各受賞作品評】

<文部科学大臣賞> 田名後 公憲 洋画 《8月15日》

画題の8月15日という日付は、第二次世界大戦の終戦記念日である。家族を戦争で失ったであろうある一家の肖像と思われる。6人の家族が様々な思いでその日を迎えているようだ。しかし、足下から暗いかげが忍び寄る不安をも表現している力作である。

<グランプリ> 石田 しのぶ 洋画 《庭園》

足立美術館の庭園だろうか。省略、単純化と色彩によりスッキリと気持ち良い造形となっている。近づいてみると、細部にわたり丁寧な仕事をされており、遊び心も加わって完成度の高さが目を引いた。

<金 賞> 高務 眞佐子 日本画 《燦燦 クレマチス》

クレマチス、ありふれた花ですが、扱い次第でかくも変身するのでしょうか。対角線の構図、二重の窓枠効果、普通は避けて通る手法ですが、コントラストをやや強めにとったり、きつくなりそうな個所をうまくテクスチャーで逃げるなどの工夫で生き生きとした生命感を表現しています。結果、鮮烈で明快な作品となりました。

<岡山県知事賞> 中山 十六 洋画 《斯る花に》

手に持っているのは、贈られた花と思われるが、その香に何を思い巡らせているのであろう。微細な表現の中に画家の心奥が描き込まれているようにも感じられる秀作である。

<銀 賞> 赤松 千代香 洋画 《粟井川》

集積が細かい点によって描かれている。闇の部分フラットにしていることで、明るい部分がより浮び上がって見え、発光しているように感じられるのが幻想的、神秘的な印象を受ける。

<銀 賞> 塩見 秀 日本画 《月下美人》

手堅い技術に支えられた明快な表現が出色です。人物、花、月など何れもややステレオタイプな表現のように思われますが、自信と確信で描き切った印象を受けました。絵作りの感性は相当にハイレベルです。いわゆる絵の勘所を心得て描かれているので安定感は抜群です。

<銀 賞> 田内 康雄 洋画 《彩・彩》

航空写真で都市を俯瞰し、また、地下の構造物や配管なども透視し、それらを造形要素として楽しい抽象絵画にまとめ上げたイメージ力に感心する。

<銅 賞> 池田 誠史 洋画 《Display shelf -Doll-》

画面の形がそのまま棚の形で表されており、画面の中に引き込まれるような絵である。棚の中で一つの要素でまとめられているのが人形だけで、画面の主役を匂わせている。周囲を飾るモノ達は、アルファベットを効果的に配置し、棚の前面にもモチーフを散りばめる事により影の調子の美しさもあいまって画面の深味を感じさせる。

<銅 賞> 稲岡 篤 日本画 《町・玖》

土や水の匂いが感じられそうなある種のリアリティが特徴です。恐らく取材したモチーフを一度解体し再構築する手法で描かれています。絵空事のようにではありますが、生活感や人の営みが、充実した画面から実感されます。

<銅 賞> カノウ ジュン 版画 《I'm here.》

巧みな画面構成によってテーマ性がより明快に表出されています。時間が止まっている中での自己の存在がセピアの色調に象徴されているように見えました。実に心理を心得た作品です。

<銅 賞> 中島 慎一 洋画 《風景 (光陰)》

洋画家の必需品、パレットとスクレーパー、温度計を貼りつけている。温度計は最近の気候変化の象徴であるのだろうか。暑さ寒さの中、制作に苦闘してきた自分史をシンプルに表現したのだろうか。

<銅 賞> 渡辺 大輔 洋画 《BEER.泡浪裏》

何か身近な色だな…と思ったら、ビールの色であった。夏の日にグッと一息に飲み込む前にこの絵がちらつきそうだ。その瞬間を絵にした新鮮な発想力・描写力に魅かれた。

<津山市長賞> 安井 晴美 洋画 《connect》

白地に筆による縦横無尽な線が踊り、躍動感溢れる画面にグレートーンの暖かな色彩が散りばめられている。一見、無造作に見えるが、構成に無駄がなく心地よくまとまっている。

<真庭市長賞> 松下 育子 洋画 《蒼路》

森の中の景色だろうか。新緑が光を受け、輝いて涼しい風がふいている様子がよく表されている。暗部もつぶれる事なく豊かな表情で描かれており、散策中にふと目にとまった感動が伝わってくるようである。

<美作市長賞> 竹久 久美 洋画 《小さなモデル》

日常の何げない姉妹のしぐさとその表情をとらえて、構図にも細やかな配慮をしながら作品としてまとめ上げている。

<山陽新聞津山支社長賞> 光井 ひろみ 洋画 《燭光》

舞台となっている食卓は、ろうそくのやわらかな光によりおだやかな空気に包まれているように見えるが、その食卓を囲む人々の関係はどこか剣呑である。その剣呑さを描くことで、目の前のろうそくの光のような優しさに満ちた世界を作者は求めているように思われた。

<津山朝日新聞社長賞> 八田 鈴子 洋画 《Pandemic》

パンデミックとは、人獣共通感染症が大流行をみせることだそうだ。我々が現代に経験している現象を色と形で表現された先進性に敬意を表する。

<奨励賞> 岡山 昌弘 洋画 《C o l d》

なにげない風景の一部だが、思い切った筆さばきでありながら、イメージの結晶化に成功している。冬の空気感が漂っている感じを受ける。

<奨励賞> 片岡 恵子 洋画 《響きあう》

ある女性ヴァイオリニストの写真をとり巻くように楽器やランプ、そして花が置かれて、この絵を見る人の視線が女性へ導かれるよう配慮されている。

<奨励賞> 川口 政己 洋画 《光る海》

雲間から射す陽光が、海面を照らしている状況を見事に表現している。海面の広がりや奥行の描法も素晴らしい。

<奨励賞> 齊木 敦智 洋画 《かかしの絵日記 ～残照～》

選んだつもりが選ばされている。糸のついた人形により何かに操られているような恐怖感を描こうとしているのか、はたまた、糸が切れているような様が解放を意味しているのだろうか。鑑賞者に委ねられた謎である。

<奨励賞> 澤田 久仁子 日本画 《マチ》

街並みに沿って張られた電線と電柱が心地よいリズムを作っています。ややもすると静かな作品になりがちな「町の絵」で現在形の町の息遣いを感じさせるような表現ができていると思います。対面が叶わず電腦上で繋がりあう人々が目に浮ぶようです。

<奨励賞> 杉本 登三恵 洋画 《三百五十余年》

モノトーンに近い色彩で丹念に描かれている。葉を落とし春に向けて力を蓄えている力強さと細い枝の繊細さが同居し、豊かな画面が構築されている。

<奨励賞> 須田 風花 洋画 《煩悶》

夜の電話BOXだろうか。制服を着た人がしゃがみこんでいる。目に見えるもの全てを描かない事や色調の組み合わせによって主題がハッキリし、不安感をより感じさせる。

<奨励賞> 妹尾 美里 洋画 《夏しぐれ》

楽しかった様々な思い出にひたる少女に夏しぐれが降りそそぐが、元気一杯の彼女には心地良いおしめりにしか感じられない。

<奨励賞> 椿野 聖梨 洋画 《残照》

残照のグラデーションをわずかな色数の微妙な階調を美しく表現されており、まるで見る人がその場に立っているような錯覚に陥る。

<奨励賞> 林 寿朗 洋画 《遠くから繋がるもの》

地上の大木の群の上に覆いかぶさるように大木が逆に描かれていて、不思議な心理状態になるようなイリュージョンが楽しめる作品である。

<奨励賞> 半田 昭夫 洋画 《静謐》

静謐とは、しずかでおだやかなさま、あるいは、世の中が治まっているさまを表す言葉である。繊細な筆致で描かれた女性に「静謐」の2つの意味を重ねているのだろうか。

<奨励賞> 的場 弘司 日本画 《平和な空間》

日本画特有の工芸的な技法に依り独特な空間が作り出されています。素直な写生に基づいた取材が生かされつつ、広い空間が象徴性をもって展開され、作者の思い描いたであろう爽やかで温かみのある抽象性に迫った作品になっていると思います。

<奨励賞> 毛利 健三 洋画 《休日》

動物の玩具たちが休日に集まって楽しそうに遊び回っている様子が、何とも微笑ましく描かれていて、茶系統と白黒だけにまとめた色彩が効果的である。

<奨励賞> 森岡 秀行 日本画 《炎上》

先ごろ火災に見舞われたノートルダムがモチーフになっているのでしょうか。痛ましい事故でしたが人類の文化に対する思いや、諦観よりも悔恨、憤り交々入り混じった情念が現れています、絵画の持つ根源的な力を感じました。

<奨励賞> 和崎 正美 洋画 《Deeply touch》

思春期の少年であろうか、思いつめた表情が見事に表現されている。画面左半分の裂けたような暗い配色の中にその原因となる体験が描かれているようだ。